

「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の育成に向けた 生徒の主体的・対話的な学びの充実

指導主事 井上 善朗

研究協力員 宇城市立松橋中学校 教諭 千原 義之

1 研究主題について

宇城市立松橋中学校の学校教育目標は「自立心と思いやりの心をもち、夢にチャレンジする生徒の育成」である。本校の教育目標を達成するためには、教師自身の教育活動における指導力及び授業力の向上を中心に位置づけ、教師自身の意識改革や授業改善に向けた取組を充実させる必要がある。また、平成27年度県学力調査において、自分の考えをまとめたり、表現したりすることが苦手な生徒が多く、思考力・判断力・表現力等に課題が見られることから、目指す生徒像の1つに「夢に向かって、自ら学び努力する生徒」が掲げられている。

このことから、本研究における「これからの社会に求められる資質・能力」を校長、協力員との協議を重ね、授業において「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」と設定した。

2 研究の視点

本研究では、生徒の「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の育成に向け、主体的・対話的な学びを充実させるために3つの視点から次のような取組を行ってきた。

(1) 視点1「学びを引き出す」について

木工芸品を扱う本題材の指導計画を構想するに当たり、美術科の目標である郷土の伝統や美術文化についての理解を深めるために、地元松橋町で作られてきた竹細工に焦点をあてることとした。授業前に教師自身が実際に竹細工教室に通い、対話を交えながら事前制作することで、生徒目線で教材研究を行え、より効果的な発問や声かけ等ができると考えた。また、「社会に開かれた教育課程」の考えを取り入れ、制作段階において地元の竹細工教室の指導者や受講者を外部講師として招き、生徒が地域住民と対話しながら制作し意欲的に学ぶことができると考えた。

授業における生徒の「学びを引き出す」取組として、まず、題材名を工夫し、生徒の生活に結び付く

題材名にするとともに、目的意識を明確にするために制作した風車を大切な人に贈ることとした。次に、題材を貫く「問い」を設定し、「身近で安価なプラスチック製品と比較し、松橋町の伝統的な竹細工の魅力とは何だろうか」とした。また、学習段階に沿って、伝統工芸（竹細工）が社会及び生活に結び付く問いを行い、生徒の主体的な活動を促すこととした。

また、本題材に係る知識や技能を定着させる際に教師による知識や技能の説明時間をできるだけ省略し、グループでの生徒同士の伝え合い、学び合い活動の時間を設けることで、生徒の「学びを引き出す」手立てとした。

本題材では以下の取組を行う。

- ① 生徒の生活に結び付ける、地元の伝統的工芸品である竹細工を教材化するとともに、題材名を工夫し、目的意識を明確にする。
- ② 竹とプラスチックの素材を比較するなど社会や生活に結び付く問いの工夫を行う。

(2) 視点2「学びを振り返る」について

美術科における基礎的・基本的事項を理解することは主体的な学習を進める上でも、制作段階において必要不可欠な要素である。また、ねらいに応じた言語活動を行うためには竹細工に関する基礎的・基本的事項を活用しなければならない。本題材では2つの取組を行うこととした

まず、本研究では授業の構成を①前時の振り返り、②本時の目標（課題設定）・計画、③活動（課題解決）、④本時の振り返りとし、授業の導入時と整理時において振り返りの時間を2回設定することとした。これは週約1.3時間の教科の時数から、前時を振り返らずに学習を進めた場合、生徒が学習事項を十分活用せず、主体的に活動することが難しい。このことから、学習シートに学習の流れを時系列に示し、学びのポイントが一目で振り返ることができるようにした。前時で身に付けた学習事項を次時の導入時に復習し、基礎的・基本的事項の定着と授業のつなが

りを図ることとした。

また、学習シートは教師による点検とコメントの記入後、美術ファイルに綴じることとし、学習事項や生徒が身に付けた力等を必要に応じて振り返ることができるようにした。

本題材では以下の取組を行う。

- ③毎時間の授業で導入時と整理時の2回にわたり「振り返り」の時間を設け、学習シートを基に生徒同士で学習内容を確認し合い、学びの定着を図る。
- ④学習シートに題材計画等を記載し生徒に見通しを持たせるとともに、毎時間のシートをファイルに綴じ、生徒に学びを振り返らせる。

(3) 視点3「学びを支える」について

生徒の学びを助けたり、意見を引き出したりするためには視覚的な教材教具の工夫、学習環境の整備及び生徒の支持的風土づくりが必要である。

そこで、本研究では研究員が実際に編んだ竹細工や竹細工教室の指導者等の作品に直接触れさせ、関心を高め竹の特性等を感じさせるとともに、制作の手順や編み方を動画で示す等ICTを活用し、視覚的に見通しを持たせることとした。次に、生徒に竹細工の基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるために、4人構成のグループを編成したジグソー法を用い、役割と責任感を持たせ対話的に学ぶこととした。制作の段階では生徒の困り感や制作のつまづきを素直に出させるために、4人グループで活動させ生徒同士が助け合える環境づくりを行った。また、地元の竹細工教室の4人の指導者等に外部講師を依頼し、生徒が主体的に相談・活動しやすい場づくりをするとともに、美術が苦手な生徒や難易度の高い技能については複数の指導者で生徒の活動に寄り添い、個に応じた指導・支援することとした。題材の終わりには、題材の振り返りに加え、「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の視点で助言を伝えてもらうこととした。

本題材では以下の取組を行う。

- ⑤複数の具体物に触れさせるとともに、竹の編み方等を理解しやすくするために黒板やICTを活用し、視覚的に繰り返し見せる。
- ⑥生徒同士がお互い協力し助け合い、計画的に制作が進むように4人グループでの活動を設定する。
- ⑦生徒が外部講師と対話しながら活動する環境づくりを行う。また、外部講師から地域の美術文化や資質・能力等についても話をしてもらう。

3 「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の検証

(1) 検証の内容

今回、美術科の授業における学習活動を通して「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」を育むことを目的とする。この力を本研究では次のように捉えることとする。

3つの生徒像
「目標を明らかにし、自分の考えを発信すること」
「目標を達成するための見通しを持つこと」
「友達や外部講師の意見を聞きながら、よりよい作品を完成させること」

この姿について、課題設定・解決の学習過程の中で行われる「主体的・対話的な学び」による生徒の意識の変容を見取ることで「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」が育まれたかを検証していくこととする。

(2) 検証の方法

学校の教育目標と生徒の実態を踏まえ、校長及び研究協力員との協議により、「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」を備えた姿として上記(1)の3つの生徒像としてまとめた。

「主体的・対話的な学び」による生徒の意識の変容を見取る意識調査を行い、その結果を分析することで今回の研究を検証する。

4 研究の実際

検証1 宇城市立松橋中学校第1学年
題材名 「材料を生かして～伝統を受け継ぐ竹細工作品を、大切な人に贈ろう～」

(1) 本題材の授業設計

① 生徒の実態から

生徒は美術科の授業に対して真剣に取り組む姿が多く見られる。また、美術に係る興味・関心を持ち、教師の発問につぶやきや挙手をする意欲的な生徒が多い。一方で表現活動に自信が持てずに消極的な生徒もいる。

授業前のアンケート調査を実施した結果、「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力が高まっている」という問いに53%の生徒ができていると答えており、約半数の生徒が「自分はこの力が付いていない」と感じている。また、「地域の方の話、地域の伝統及び

美術文化などを、自分の考えを持ち伸ばすために役立てている」という問いには約 19%の生徒が役立てていると答えており、約 8 割の生徒が、美術科の授業は自分の生活や地域の文化とつながりが薄いと感じていることが分かり、課題が明確となった。

また、これからの社会を見据えて、生徒が自らの課題を設定し粘り強くやり遂げようとする意識が低いことも課題として挙げられる。

これらのことから、課題を解決する際に、地域の伝統的工芸品を取り扱った題材とすることや生徒の生活に結び付く「問い」の工夫、導入時・整理時の 2 回の振り返り、ジグソー法などグループでの効果的な学び合い活動を行うこと、外部講師との対話的な学びによって、「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の育成が図られると考える。

② 題材観

本題材は、身近な竹の持つ性質や特徴を生かして風車を制作することにより、竹の塑性や弾性を理解しながらものづくりの喜びや楽しさを味わわせるとともに、地域の伝統や美術文化への興味・関心を一層高めていこうとするものである。竹は生徒にとって触れたことがある材料ではあるが、加工には刃物等の用具を使うため危険を伴う。また、竹の編み方も簡単ではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と見通しを持った取組が必要となる。

さらに、「社会に開かれた教育課程」の開発を念頭に置き、美術文化を通して社会や世界との接点を持たせられるような授業を創造するために、地元松橋町で活躍されている竹細工教室の指導者及び受講者に講師依頼をする。教育課程を介して研究協力員の中学校の教育目標を社会と共有し連携しながらねらいを達成するには相応しい題材である。

③ 題材の目標

単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○竹細工に関心を持ち、よさや美しさを感じ取り、自ら主体的に風車をつくらうとする態度を身に付けている。 ○自ら課題を設定し、[共通事項]を踏まえ和紙やビーズ等の配色や竹そのものの色や材質の美しさを考えて配色等の計画を立てている。 ○竹の特性を理解し、その美しさやよさを生かしながら加工したり、彩色したりしている。 ○生徒作品や外部講師が制作した参考作品を鑑賞し、言語活動を通して竹の持つ風合いや木目の美しさなど松橋町の伝統工芸作品の魅力を学び、広報誌等で地域に発信している。
-------	---

美術への関心・意欲・態度	①自ら主体的に風車をつくらうとする態度を身に付けている。
発想や構想の能力	①これまでの制作を振り返り、自らの課題を設定している。 ②和紙やビーズ、竹そのものの色や材質の美しさを考えて配色等の計画を立てている。
創造的な能力	①竹の特性を理解し、そのよさを生かしながら加工している。 ②竹そのものの美しさを生かしながら、彩色をしている。
鑑賞の能力	①作品を鑑賞し、竹の持つ風合いや木目の美しさを感じ取っている。 ②松橋町の伝統的工芸品の魅力を感じ取り、生活と美術のかかわりに関心を持っている。

④ 題材計画

【題材を貫く問い】身近で安価なプラスチック製品と比較し、地域の伝統的な竹細工の魅力とは何だろうか。

次	時	学習活動	評価及び研究の視点
1	1	1 作品例を鑑賞し、竹細工に興味を持ち、竹の基本的な取扱について学ぶ。 2 竹の特性を生かすため、どんな玩具をつくるのか、構成を練る。	【学びを引き出す】 ①竹で作られた籠等を実際に見て、触り、匂い使用目的等を問い、考えさせる。 【学びを振り返る】 ③振り返りの時間に学習事項を学習シートに記入させ、周りの生徒等に伝える。
2	2	3 4人グループで役割を分担し、それぞれが学んだことをグループで確認し合い、制作の順序を確認する。	【学びを引き出す】 ②竹細工制作が生徒の生活に結び付いていることを考えさせる「問い」をする。 【学びを支える】 ⑥ジグソー法を活用し生徒に各々役割を持たせ、プレゼンし学び合いを促す。
3	3・4	4 作品の作り方を友達と教え合ったり、講師に教わったりしながら竹細工作品を作る。 (本時 2 時間連続)	【学びを引き出す】 ②生徒が制作のポイントを理解し、意欲的に制作できる「問い」や視覚的教材を工夫する。 【学びを振り返る】 ③学習シートに竹細工教室の指導者から学んだ言葉や生き方等を記入させ、発表させる。 【学びを支える】 ⑤黒板及び ICT を活用し、制作のポイントを絞り込み分かりやすく提示する。 ⑦外部講師との意見交換の時間を設定し、松橋町の伝統文化や生徒への願い等を話してもらう。
4	5	5 出来上がった作品や竹でできた他の作品を鑑賞する。 6 よりよい生活を送るために、玩具をいつどのように活用するか考える。	【学びを振り返る】 ④「振り返り」の時間に地域に根付く伝統技術に触れ、感じたことをまとめる。また、この題材を通して、身に付いた力は何か発表させる。

(2) 指導の実際

本時の目標

- ①竹の特性を理解し、そのよさを生かしながら加工している。
- ②竹そのものの美しさを生かしながら彩色している。

過程	学習活動
導入	1 前時の学習内容を振り返る。 2 本時の目標を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">加工するコツや竹の素材を生かす装飾を探り、松橋の伝統を受け継ぐ風車を作ろう。</div>
展開	3 竹で羽を編む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">〔本時の問い〕竹の特性や竹細工の魅力とは何だろうか、各グループで探ってみよう。</div> (1)本時の問いについて話し合う。 【視点1】学びを引き出す 生徒が前時に理解した制作のポイントをグループのメンバーに伝え、協力して製作するように設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">  <p>竹は水分を吸収する時間が長くなっても編むことができます。</p> </div> (2)制作を進める。 4 グループで外部講師の先生の助言等を聞きながらよく回る風車の羽をつける。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">  <p>編む時には、底が井型になっておくといいよ。</p> </div> 【視点3】学びを支える 生徒が主体的に質問し外部講師から技能に関する助言を受けて制作に生かす。 5 風車に和紙、ビーズを飾り付ける。 (1)持ち手となるひごに羽を固定する。羽が回ることを確認したら、和紙等で飾り付ける。 (2)本時の問いに対する学びをまとめ、発表する。

今回の学習で「集中力」、「あきらめない力」が身に付いたとの意見が多く出されているようです。



6 外部講師の話を聞く。

○資質・能力及び松橋中学校の生徒への願い等

今日は竹を切ったり、削ったりするときに、刀を使いましたが、小刀の方の方向を学んでもらうことができました。



7 学習の振り返りと次回の学習の予告を聞く。

○外部講師へのお礼
○風車が完成しなかった生徒への指導・支援

(3) 検証結果と考察

本実践の検証結果とその考察について、研究の視点による「主体的・対話的な学び」の充実からの視点と、資質・能力の観点の2点について述べる。

①研究の視点からの「主体的・対話的な学び」の充実について

ア 研究の視点1「学びを引き出す」について

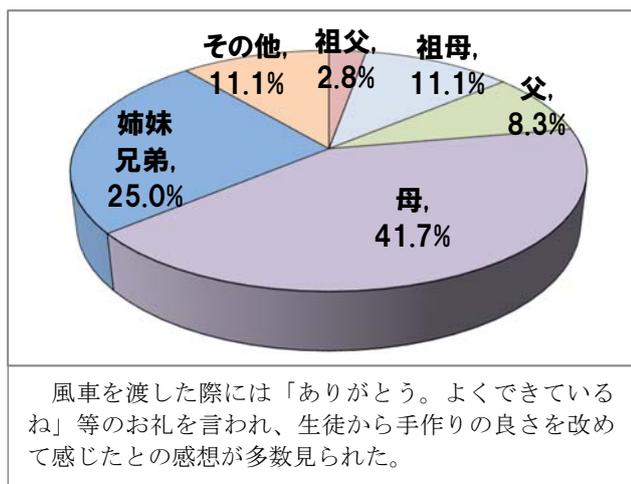
表1は、「学びを引き出す」に関わる学びの様子について見取る質問紙調査の結果である。課題を考え、他者との対話や協働によって制作（解決）に向かった意識について調査している。

数値が伸びたのは「自分は、新しい課題、テーマ及び題材に出会ったときに、それを解決したり、より良い作品をつくったりしてみたいと思う」であった。本実践における「新しい課題、テーマ及び題材の出会い」がこれまで地元で作られてきた竹細工であり、社会や学校生活での課題に気づき、美術科における問題解決学習の機会となった。

次に、「自分は、先生の話や、他の生徒の発表を聞いて、美術科の学習がおもしろくなったと思う」については、竹細工に関する基礎的・基本的な知識や技能を習得する際に社会や生活に結び付く問いを「竹の特性や竹細工の魅力とは何だろうか、

各グループで探ってみよう」等としたことにより主体的に自力解決したり、友だちと協働解決したりする場面が増え、生徒が主体的、意欲的に活動し学習が充実したと考えられる。

また、題材名を工夫し目的意識を「大切な人に贈ろう」としたことで、生徒が竹細工を完成させたいとの思いが強くなり、目標を明確に持ち、主体的に学習したと考える。検証授業後に完成した風車を誰に贈ったかと聞いたところ、以下のとおりであった。



つまり、研究の視点1「学びを引き出す」による「社会に開かれた教育課程」の側面、いわゆる地域の美術文化に係る教材を取り入れた題材とし、生徒に確かな目的意識を持たせることや、生徒自身の生活や社会と関連した問いを取り入れることが、生徒に自分の考えを持ち、他者からの意見や助言を生かしながら学習を充実させていく方法だと考えられる。

表1 学び全体の変容 4件法

	質問	事前	研修後	学習後
学びを引き出す	自分は、先生の話や、他の生徒の発表を聞いて、美術科の学習がおもしろくなったと思うことがある。	2.69	2.79	2.94
	授業の中で、先生や友達に質問されたりアドバイスをされたりすることによって、自分の考えが広まったり深まっている。	2.81	2.70	2.97
	授業の中で、自分たちで課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことがある。	2.78	2.58	2.68
	自分は、新しい課題、テーマ及び題材に出会ったときに、それを解決したり、より良い作品をつくりたいと思う。	2.75	2.97	3.00

イ 研究の視点2について

表2は、「学びを振り返る」に関わる学びの様子

について見取る質問紙調査の結果である。身に付けた力を他の学習に活用したり、学んだことを振り返ったりした意識について調査している。

数値が伸びたのは、「授業を通して知ったこと、できるようになったことが、他の授業や普段の生活の中で活用できるのではないかと考えている」であった。本実践において題材の終末で「今回の学習で身に付いた力をどのように生かしたいか」聞いたところ、「難しい問題にあたった時でも集中力を絶やさず、解けるまで取り組みたい」「今回の学習で身に付けたコミュニケーション力を生かして将来仕事に就いた時にも協力して取り組みたい」との感想があった。

次に、「自分は、美術科の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役立つと思う」の質問に対する数値が0.4ポイント向上していることから、授業の導入や整理の時間に学習の振り返りが学びの定着と学び方の訓練となり、自分の将来にもつながると考えていることが分かった。

また、事後アンケートで学習の流れが記載されている学習シート及び学びを蓄積することができる美術ファイルがあったことに関して生徒の意見を聞いたところ、約6割の生徒が授業中や自宅で学習事項等を見直し振り返ったと答え、約4割の生徒が苦手意識を克服できたと答えた。

表2 学び全体の変容 4件法

	質問	事前	研修後	学習後
学びを振り返る	自分は、美術科の授業を通して知ったこと、できるようになったことが、他の授業や普段の生活の中で活用できるのではないかと考えるようにしている。	2.31	2.64	2.85
	自分は、美術科の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役立つと思うことがある。	2.39	2.45	2.79
	自分は、地域の方の話、地域の伝統及び美術文化などを、自分の考えを持ち、伸ばすために役立っている。	1.86	2.55	2.50
	自分は、美術科の授業で何をしたらだけでなく、何を知ったか、何ができるようになったかを振り返っている。	2.00	2.48	2.50

ウ 研究の視点3について

表3は、「学びを支える」に関わる学びの様子について見取る質問紙調査の結果である。グループで活動し協力して助け合うことにより作品が完成したかを振り返り、その意識を調査したものである。

数値が伸びたのは、「難しい課題やテーマに出会

ったときに、必要があれば他の人の力を借りて解決しようとしている」の項目であった。本実践において、生徒にとって竹細工は初めての経験であり、自力解決が難しいことが予想されたため、毎時間グループでの活動を設定し、生徒の支え合い、助け合いができる環境づくりを行った。特に、竹細工の基礎的・基本的事項の理解や技能を獲得する際にはジグソー法を活用した。事後アンケートによると8割を超える生徒が「自分たちの学びにつながった。生徒同士の学び合いは楽しく、次もやってみよう」と答えている。このことにより、対話的な活動が生徒同士の学びを支え、見通しを持ちながら風車を制作したと考える。

なお、最も難しい技能を要する風車の中心となる編みこみと羽づくりをする時には、美術教師だけでなく地元の竹細工の指導者及び受講者合計4人の外部講師が参加したことにより、さらに相談・活動しやすい環境づくりが整い、個に応じた指導や支援が行き届き、風車を完成させることができたと考える。

また、視覚的に分かり易い板書と併せてICT活用をしたことで、事後アンケートによると「とても分かり易かった」「苦手意識があったが、動画を見ると作ってみようと思えた」と答えた生徒が約7割いたことが分かった。生徒が学習の流れを理解し、生徒全員が共通した方向性を持って活動できれば、学習の充実につながると考える。

表3 学び全体の変容 4件法

	質問	事前	研習後	学習後
学びを支える	自分は、美術科の難しい課題やテーマに出会ったときに、必要があれば他の人の力を借りて解決しようとしている。	2.86	3.12	3.09
	自分は、美術科の授業の中で、他の人の意見を聞いて、よいところを取り入れたり、改善点を指摘したりしている。	2.69	2.73	2.74

②「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の育成について

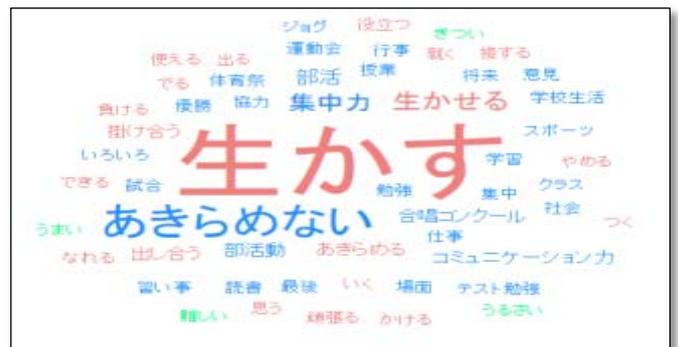
今回の研究の目的である「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」を育むことに関し、意識調査の結果を表4に示す。

表4 学び全体の変容

質問	事前	研習後	学習後
----	----	-----	-----

自分は、課題を解決する時や難しい作品を制作する時でも、最後まで粘り強く取り組んでいる。	2.56	2.88	2.97
自分は、美術科の授業を通して、「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」が高まっていると思う。	2.33	2.72	2.74
自分は、美術科の授業を通して、松橋中学校の目指す生徒像「夢に向かって、自ら学び努力する生徒」に近づいていると思う。	2.17	2.52	2.59
自分は、美術科の授業は、なりたい未来の自分の姿に近づくために役立っていると思う。	2.06	2.30	2.59

表4の結果から、事前、研究授業後、題材学習後と学習が進むにつれ、どの質問項目においても向上している。4つの項目の中でも高い伸びがあったのは「なりたい未来の自分の姿に近づくために役立っている」であった。その理由として、生徒から「この学習で集中力が付いた。」「コミュニケーションをとりながら学習を進めていく方が、いい作品ができる。」との感想があった。テキストマイニングの結果は次のとおりである。



また、この学習を通して、当校の目指す生徒像に近づいていると感じている生徒が増えている。これまで、目指す生徒像を知らない、意識していない生徒が約7割いたが、本実践を通して意識しながら学習を進めることができるようになったと考える。

5 研究のまとめ

今回、中学校美術科では、研究の視点によって「主体的・対話的な学び」の充実を図り、「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「目標に向け、見通しを持ってやりとげる力」の育成につながったかを検証した。

(1) 成果

これまで述べてきた前述「4の(3)検証結果と考察」により示した表1～3の学びの全体の変容を「主体的な学び」「対話的な学び」の2点で整理し直したものが表5である。この結果から、研究の視点による

取組により、学んだことを次に生かそうとする「主体的な学び」、他者との協働による「対話的な学び」が充実したと考える。

表5 学び全体の変容

	質問	事前	研習後	学習後
1	自分は、美術科の授業を通して知ったこと、できるようになったことが、他の授業や普段の生活の中で活用できるのではないかと考えるようにしている。	2.31	2.64	2.85
2	自分は、美術科の授業の中で、これまでの学習や経験を活かして自分の考えを持つことができています。	2.33	2.64	2.65
3	自分は、美術科の課題を解決するとき（作品を制作するときなど）に、1つのやり方だけでなく、別のやり方がないか考えるようにしている。	2.68	2.70	2.71
4	自分は、先生の話や、他の生徒の発表を聞いて、美術科の学習がおもしろくなったと思うことがある。	2.69	2.79	2.94
5	自分は美術科の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うことがある。	2.39	2.45	2.79
6	自分は美術科の難しい課題やテーマに出会ったときに、必要があれば他の人の力も借りて解決しようとしている。	2.86	3.12	3.09

これからの社会に求められる資質・能力については、研究の視点1「学びを引き出す」における生徒の生活に結び付く地元の伝統的工芸品の教材化と問いの工夫、視点2「学びを振り返る」における授業の導入時と整理時の2回の振り返りの取組と学習シート等の工夫、視点3「学びを支える」における生徒同士の対話的な活動と複数の外部講師の指導や支援により、学習内容の定着につながったと考える。また、学習内容と資質・能力の獲得による学びがそれぞれ充実したことが分かった。

これらのことから、研究の3つの視点「学びを引き出す」「学びを振り返る」「学びを支える」の取組により、「主体的・対話的な学び」を充実させることで、資質・能力を育成することができることを明らかにすることができたと考える。

また、「社会に開かれた教育課程」となるように、学習内容を「地元で長い間制作され、活用されてきた竹細工をつくること」に設定した。実際に生徒とともに制作に携われた外部講師からは「今回は竹を使って風車を制作したが、生徒には竹に限らず素材の特徴やよさを感じて作品をつくったり、生活に生かしたりしてほしい」「竹細工は制作が難しいが、男女問わず、対話し助け合いながら制作を進められていたことが作品の完成につながったと思う」「風車の作り方を生徒に教え

たが、活動を通して地元の生徒と楽しく触れ合い、生きる元気をもらった。学校に来てよかった。」との声が聞かれた。よりよい地域になるための助言がある一方で、地域の美術文化を大切に守っていかなければならないことも分かり易く生徒に話された。今後は、本研究のように美術科に限らず、教育課程全体に踏み込んで、地域創生の鍵となるような教育活動を工夫することにより、効果的な学習の展開も考えられる。「問いの工夫」と併せて、考えていきたい。

(2) 課題

質問紙調査から、見えてきた課題は一題材では確かな資質・能力の育成は図れないということである。各質問項目は概ね向上しているが、数値は2.50～3.09であり、伸びしろが多く残されている。この題材についてもさらに教材研究を進め、生徒の学びを深める手立てをうっていかなければならない。

美術科における中学1年生の発達段階から、自分の思い通りの作品ができず自己肯定感が低くなる時期にあり、生徒の実態を踏まえた教材づくりが必要になる。しかし、すべての題材を地域と関係付けながら学習を進めるには、地域のネットワークづくりと時間が不足しているのが現状である。地域の教材を開発し、事例研究をしていく必要がある。

また、本研究のような実践を積み重ねていかなければ、生徒が自らの成長を実感することはできないものと考えられる。項目の中で特に低い数値である「自分は、地域の方の話、地域の伝統及び美術文化などを、自分の考えを持ち、伸ばすために役立てている」という質問項目で、生徒の感想からも「美術の授業で学んだことを実際に役立てていく場面がない」との記述があった。今後も、美術科の学習が生徒の社会や生活に結び付くように教材研究をしていく必要がある。

さらに、本研究では追及しきれなかった「深い学び」については、今後研究及び検討していく必要がある。生徒全員が深い学びをすることで質の高い資質・能力を獲得するということができるように、文献研究をはじめ研究を進めていく。

《引用・参考文献》

- ・文科省(2008)中学校学習指導要領解説美術編
- ・文科省(2016)次期学習指導要領改訂に向けた「審議のまとめ」
- ・大橋功(2011)美術教育概論 日本文教出版